様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ６ 日現在

機関番号：３２６１２
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０３９５

研究課題名（和文）同時代のインド学と言語学を通して見たマラルメの言語観の形成に関する研究

研究課題名（英文）Studies on the formation of linguistic view of Mallarme as seen through linguistics and Indology of the same age

研究代表者
大出　敦（ODE, Atsushi）

慶應義塾大学・法学部・准教授

研究者番号：９０３６５４６１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,400,000円、（間接経費）　720,000円

研究成果の概要（和文）：本研究で、われわれはマラルメの言語観の形成に果たした同時代の言語学とインド学の影響を考察した。言語学とインド学とにマラルメがかかわったのは、彼が直面した文学的な「虚無」の問題の解決のためであった。しかし言語学とインド学を通した虚無の探求は、彼に散文作品「イジチュール」の挫折しかもたらさなかった。これ以降の言語学や東洋学と接点を持つマラルメの「古代の神々」や「英単語」は虚無の再検討であり、ここから最終的に東洋的な空無と類似する思想を取り入れた言語観を導き出したことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：In this study, we considered the influence of the linguistics of the same age from the point of view of emptiness that Stephane Mallarme faced. Mallarme was concerned with linguistics and the India study for solution of the problem of this "nothingness." However, finally the pursuit of the nothingness, which let linguistics and the India study pass, brought him only failure of his prose work, Igitur. Although les Mots anglais and the les Dieux antiques after this were related to linguistics or Oriental studies, we showed clearly that these works are the texts in which Mallarme reexamined nothingness, and he took in thought similar to oriental nothingness finally from here.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：ステファヌ・マラルメ　フランス　象徴主義　19世紀

１．研究開始当初の背景

（1）マラルメ研究の近年の動向は、国内外を問わず 1880 年代から 90 年代にかけてのマラルメの後半生の著述、とりわけ散文作品の分析・研究が主流を占めている。その一方で 1860 年代後半の「精神の危機」の時代から 1884 年にヴェルレーヌやユイスマンスに評価されるまでの沈黙の時期は、ほとんど研究対象とされず、研究が進んでいるとはいえなかい状態であった。

（2）またマラルメの言語観は彼の詩学を考える上で重要な要素となっていることはいうまでもないが、この言語観の形成に関する考察も本格的には行われてきていなかった。しかし「精神の危機」以降の沈黙の時代にマラルメの言語観が大きく変容し、その後のマラルメの詩学形成に影響を及ぼしたと考えられる。この期間にマラルメは同時代の比較文法と呼ばれた言語学や虚無の信仰と誤解されていた仏教に関心を示し、そこから独自の言語観の萌芽を見出した可能性があるが、これまで掘り下げて研究されることはなかった。

２．研究の目的

マラルメの詩学形成の重要な時期である「精神の危機」以降、1884 年までのマラルメの言語観を〈虚無〉をキーワードにして、この問題を解決するために当時の言語学やインド学をどのように参照したかを明らかにすることを目的とした。

（1）マラルメが「精神の危機」のなかで発見した〈虚無〉がいかなるものであるかを明らかにする。

（2）この〈虚無〉の問題を解明するためにマラルメが同時代の言語学、あるいは言語の探求にどのようにかかわっていったか。

（3）〈虚無〉の信仰といわれた仏教の思考をマラルメはヘーゲルを通じ、間接的に受容するが、この仏教思想が彼の言語観形成にどのような役割を果たしたか。

以上の考察を通して、挫折した「エロディアード」「イジチュール」と長い沈黙の時代を経たあとで書かれることになる後期の作品群とをつなぐ詩学をマラルメがこの時期に形成したことを明らかにする。

３．研究の方法

（1）１次資料としてマラルメの作品『ディヴァガシオン』、『古代の神々』、『英単語』、「エロディアッド」、「あらわれ」、「イジチュール」、「言語に関するノート」を用い、ここからマラルメ、とりわけマラルメの発見した〈虚無〉と同時代の言語学・インド学と接点を持ちうる箇所を抽出する。

（2）一方、同時代の仏教を含むインド学、言語学の文献の蒐集・分析を行い、マラルメの時代の知のフレームを作り、インド学、言語学から〈虚無〉をどのように捉えうるかを探る。

（3）これらの作業を踏まえた上で、マラルメのテクストをこの知のフレームに当てはめ、マラルメが同時代の知と共有しているものと逸脱しているものとを浮き彫りにし、この逸脱した部分にマラルメの独自性を探ることにした。

４．研究成果

本研究で明らかにしたことは、マラルメの言語観は〈虚無〉と密接に関わっているが、この〈虚無〉のとらえ方が 1860 年代末の「イジチュール」や言語学の学位論文の構想の挫折を境にしてそれ以前とそれ以降とでは異なっている点である。その〈虚無〉の捉え方の変化に関与したものが、同時代の言語学であり、インド学であった。これらを梃子にしてマラルメはヨーロッパの思想体系とは全く異質な〈虚無〉を見出し、自分の詩学に結実させたことを明らかにした。このことに関しては「同時代の言語思想を通して見たステファヌ・マラルメの詩学の形成」と題した論文にまとめ、詳しく論じた。以下はその概要である。

<u>第１章　存在しない言語を求めて</u>　マラルメの詩論「詩の危機」のなかの「夜」という語には「明るい響き」があり、「昼」には「暗い響き」が付加されているという一節から、マラルメのクラテュロス主義的な傾向を抽出し、マラルメは語にはコミュニケーションの意味とは別に何らかの理念（イデア）が隠されているという表層／深層の関係を前提にしているように見えるが、果たしてマラルメはそのように考えていたのかという問題を提起した。

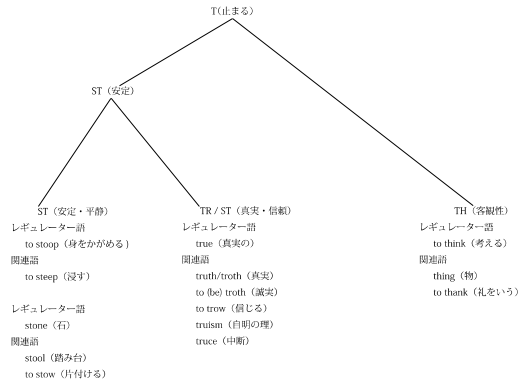
<u>第２章　ポーという戦略</u>　語には表面的な意味の下に理念（イデア）が隠されているというマラルメの表層／深層の図式の起源をエドガー・アラン・ポーの詩学、いわゆる「効果の詩学」にここでは求めた。マラルメはこのポーの「効果の詩学」に忠実であろうとしたが、内在しているはずの語の理念（イデア）をうまく引き出すことができずに「エロディアード」の詩作を断念、「精神の危機」を経験することになったということができる。

<u>第３章　マラルメの挫折、あるいは新たな出発</u>　マラルメは「精神の危機」を経験し、〈虚無〉を発見するが、この〈虚無〉を仏教を援用して説明するヘーゲル的な〈虚無〉と理解していたことを論証。ヘーゲルによれば、〈絶対者〉は〈暗闇〉、〈絶対無〉として表現され

るべきもので、いかなる形式も内容も持たないものとされる。そのためこれをあえて表現しようとすると無としてしか表現できない。しかしこれは何もない無なのではなく、いかなるものにもなり得る可能態なのである。この〈虚無〉をマラルメは言語に応用し、深層に潜む理念（イデア）こそ虚無であると言語学の学位論文で論じようとしていたことを論証した。しかしこの構想も「イジチュール」と同様に破棄されてしまったことを考えると、マラルメの表層／深層の図式の深層が〈虚無〉であるとする考えは何らかの破綻を引き起こしたと考えられる。

第４章　空疎な神々　これ以降、1880 年代半ばまでのマラルメの著述活動は、この〈虚無〉の問題の再検討であり、再解釈であるといえる。当時の言語学から生まれた比較神話学に基づくマラルメの『古代の神々』もこうした再検討の活動の一つと位置づけられよう。マラルメがこの作品でよく使用する表現として神々の固有名詞が「現在では意味を持っていない」といっているが、この紋切り型に近い表現を分析の対象として取り上げた。そしてこれを表層／深層の図式にあてはめて考えてみると、深層は実は何もなく、無という可能態の形ですら存在しないのではないかと仮説を立てた。最終的にここでは表層が絶えず何もない深層に滑り込むことで新たな意味が生じる可能性を明らかにした。

第 5 章　虚構の言語　一方、『古代の神々』と同時期に書かれた『英単語』も〈虚無〉と関わる。これは語をさらに微分的に分解し、文字のレベルで分析したものである。ここでマラルメはヨーロッパに伝統的にある文字に本質的な理念（イデア）が隠されているというやはり表層／深層の構造を問題視する。『古代の神々』で語には深層がないことを明らかにしたように、文字の深層はやはり無であるが、ミションの図に基づいて文字はその無を隠蔽し、疑問視させない下図のような文字の支配構造を作り出しているということができる。そして同時代の言語学はそれを補強さえしている。



しかし実際は文字を根拠づけてくれるものは隠されているわけでもなく、無でしかないのである。そのため一点透視図法の消失点のような起源にすべての根拠、すなわち文字を求め、語を帰属させること自体が虚構となる。その時、文字には外部が存在し、その外部で別の体系を作り出すことができるようになり、その時世界は別のものに読み換えられるようになることを明らかにした。

第６章　詩とは何か　文字が言語を支配するという特異な言語観をマラルメは形成し、しかしその構造は虚構にすぎないことをさらに暴き立てる。そして絶対ではなく、虚構であり、仮のものである以上、別のものに読み換え、組み替えることができることを『英単語』で明らかにした。マラルメはこれが言語にとどまらず、文学にも当てはまるとする。そして起源に位置するものの深層には何もなく、そのため外部が存在し、そこで別のものとして読み換える行為をマラルメが「詩」あるいは「文学」と呼んでいたことを晩年の批評「文芸／文字のなかの神秘」を用いて論じ、結論とした。すなわち絶えずさまざまに読み換え、世界を絶えず一新させ続けることがマラルメの最終的に求めた詩の形であるのである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）
① 大出　敦、空疎な神々―ステファヌ・マラルメ『古代の神々』試論、教養論叢、査読無、135 号、2014、71-104

② 大出　敦、存在しない言語を求めて―ステファヌ・マラルメの言語観、教養論叢、査読無、134 号、2013、35-62

〔学会発表〕（計１件）
① 大出　敦、マラルメの挫折、あるいは新たな出発点、マラルメ・シンポジウム 2013 マラルメは現在……、慶應義塾大学、2013

〔図書〕（計１件）
① 大出　敦編著、水声社、マラルメの現在、2013、396

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
大出　敦（ODE, Atsushi）
慶應義塾大学・法学部・准教授
研究者番号：９０３６５４６１